公益財団法人 日本野鳥の会
Wild Bird Society of Japan

探鳥会スタッフ通信　2013年9月号

「探鳥会スタッフ通信」は、探鳥会の考え方や様々な運営手法について、全国の連携団体の探鳥会リーダーの皆様と情報交換を行うための通信です。

目 次

◆安西英明の探鳥会講座
「探鳥会は何のため？」・・・・・・・・・ 1
◆探鳥会のリスクマネジメント講座
「ツキノワグマ」・・・・・・・・・・・・ 3
◆探鳥会訪問記（二子山定例探鳥会）・・・ 6
◆探鳥会保険集計結果（2013年7月分）・8
◆初心者の対応、どうしてますか？・・・・10
◆協働探鳥会：仲間を増やすための探鳥会における東京の取り組み・・・・・・・・・・・・11
◆普及室からのお知らせ
・「夏休みに親子向け「バードカービング体験講座」を実施！」・・・・・・・・・・・・13
・「連携団体主催の探鳥会を広報しています」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
◆記事への感想お待ちしています・・・・・15
◆探鳥会スタッフ通信の購読について・・・16
◆編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・16

◆安西英明の探鳥会講座

「探鳥会は何のため？」

＜金田平さんの危惧＞

40 年近く前になるが、私が探鳥会リーダーになる頃に受けた研修は何だったろうか？

神奈川県の丹沢ホームで、日本自然保護協会の自然観察指導員講習会の前身にあたる講座には参加していた記憶がある。講師役は柴田敏隆さんと故金田平さんだったと思う。

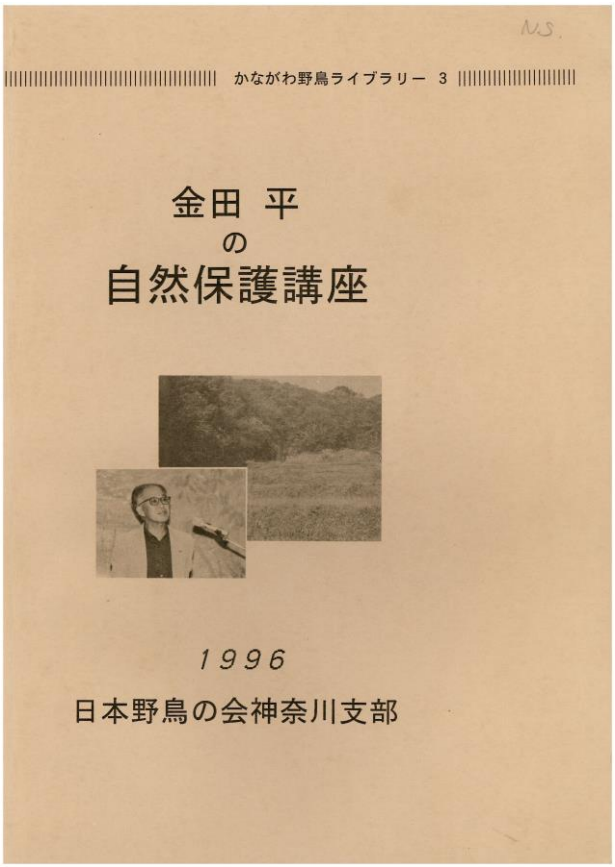
金田さんは 1973～1974 年、野鳥誌に『自然保護を考える』を連載していた。神奈川支部報「はばたき」では 1987～1992 年、『自然保護講座』を連載していたが、1992 年 6 月号では探鳥会の歴史に触れてから、種の識別に終始する探鳥会の問題点について書かれている。自ら担当した探鳥会で「たっぷり鳥を見、鳥以外も楽しみ、帰ったら地元の鳥をよく見て、鳥が豊かにいることが、人にとって住みよい環境であり、そのために何をすればよいのかを考えて欲しい」というまとめをした事例をあげ、「種識別に終わらない探鳥会を工夫しないと、野鳥の会が自然保護団体だなどと言えなくなることを自覚しよう」と結んでいる。

＜歴史的評価とこれから＞

金田さんや柴田さんが活躍された三浦半島自然保護の会は、最近の環境教育学会誌に掲載された論文（＊）では「野外の自然を現場で非採集の方法（＝観察）で理解し楽しむという方法論を確立した」と評されているが、その段落では続いてこう記されている。・・・その背景には、中西悟堂が設立した日本野鳥の会の探鳥会スタイルがあった（伊藤・小川.2008）。中西は仏教的世界観を背景として、それまでの「捕る、飼う、食う」という自然趣味を転換させ、バードウォッチングという西欧風の自然接触法を日本文化として根付かせた・・・

野鳥の種の野外識別を学ぶこと、多くの種の野鳥を見てもらうこと、珍しい種との出会いはきっかけとしては効果的だが、それらは今や探鳥会でなくとも可能だし、そこから自然の理解や自然保護、会や支部の活動紹介などに展開してこそ日本野鳥の会の探鳥会ではないだろうか？（当会発行の図鑑ではフィールドマナーを含め、そのような展開に結び付けられるように工夫しているつもりである）リーダー不足や会員減が言われて久しいが、日本野鳥の会８０周

年も見据えて、今一度、すべての連携団体や探鳥会に関わる皆様とともに、「何のための探鳥会か？」について、共有できる考え方を確認しておく必要があると思う。



▲神奈川支部が金田氏の連載をまとめた冊子の表紙

＜探鳥会の役割＞

探鳥会のやり方は連携団体によって、また探鳥会の場所や対象、実施するリーダーによってもさまざまだろう。しかし、どの連携団体の探鳥会でも日本野鳥の会の探鳥会であるなら、共通した目的や役割があるはずだ。日本野鳥の会としての探鳥会の考え方は、当会発行の「あなたもバードウォッチング案内人」（1992 年発行、現在のタイトルは野鳥と自然の解説実践ハンドブック）でまとめたつもりだが、「日本野鳥の会の理念」は 1992 年に文章化され、冊子になったものは支部・連携団体に送付されている。なお、当会会誌「野鳥」では、毎号、奥付の頁に理念の要約を記すようにしている。

私が担当して支部宛に発送していた「探鳥会リーダー通信準備号」の連載『探鳥会リーダーを考える』ではその１．（1995 年 8 月）で、以下のように探鳥会の役割について記した・・・

① 野鳥もひとも地球のなかま」を広める： バードウォッチングの楽しみやマナーを広めつつ、野鳥もひとも地球のなかま」という会の理念の考え方を普及する。
② なかまづくり：未入会の参加者には、会や支部の活動を紹介して入会をおすすめする。また、会員の方には継続する意識や意欲をもっていただく。
③ 人材の育成：探鳥会担当など支部や会を手伝う人を発掘、育成する。
④ コミュニケーション：支部担当者と探鳥会参加者、参加者同士の親睦や情報・意見交換の場となる。
⑤ その他：「実施場所の自然環境の重要性をアピールする」「実施場所の記録を蓄積し、自然保護に結びつける」など、探鳥会ごとの目的に応じた役割も考えられる。

探鳥会リーダーはほとんどがボランティアですから、できる範囲、できるところから関わるのが原則です。また、自分の想い、やり方や考え方を活かせることがやりがいになりますから、無理をして続かなかったり、担い手が減っては意味がありません。しかし、①②があってこそ日本野鳥の会だろうし、③④を意識しないと、同じ顔ぶれで鳥を見て終わってしまうだけで、やがて行き詰ってしまうものと思われます・・・

１１月 9、10 日に連携団体総会が予定されていて、その開催案内がそろそろ支部・連携団体宛に届く頃と思われるが、そこで探鳥会についての情報・意見交換を行うことになった。各地の連携団体の事例はこの探鳥会スタッフ通信を通じて共有化を図っていきたいが、連携団体総会においてもそのような機会が作れたら・・・と考えている。

＊引用文献　小川潔・伊藤静一.2013.「自然保護教育の原点と環境教育の課題」『環境教育』２３（１）

（普及室/安西英明）

◆探鳥会のリスクマネジメント講座

シリーズ第6回：ツキノワグマ

世界には、クマの仲間が８種知られており、わが国にはツキノワグマ（亜種ニホンツキノワグマ）とヒグマ（亜種エゾヒグマ）の２種が生息している。

ツキノワグマは、本州・四国・九州に生息する中型のクマで、九州では絶滅状態といわれている。また、下北半島、紀伊半島、東中国地域、西中国地域、四国山地の個体群は、保護に留意すべき地域個体群として環境庁のレッドデータブックに掲載されている。

稀少な大型獣類で、出会おうと思ってもめったに出会えるものではないが、一般的には必要以上に恐れられている。ツキノワグマによる人身事故の被害者数は2004 年に 109 人(内２名死亡)、2006 年に 145 名（内３人死亡)、2010 年は 147 名(内２名死亡)と増加傾向にあるものの、死亡者数においてはハチによる死亡者の比ではない（ハチによる死亡者は年平均約４３人、ヒグマについても過去５０年間で死亡者は年平均１人)。従って、ツキノワグマの生態や対処法を知っていれば、一般的にイメージされているほど危険な生物ではないのだ。

＊ツキノワグマはどんな生物？

全身が黒色で、胸に白い三日月模様がある。頭からお尻まで１２０～１４５ｃｍ、体重７０～１２０ｋｇ、北海道を除けばわが国に棲む最大の陸生哺乳類。

春は、ブナの若芽や草本類、夏はアリやハチなどの昆虫類、秋にはミズナラ、サルナシなどの木の実を多く採食する。ごく稀に牛などの哺乳類を捕食することもあるが、哺乳類を餌とする割合はヒグマに比べると低い。冬季大木の樹洞や岩穴などで冬眠し、冬眠中に１～２頭の子供を出産する。

▲ツキノワグマ；胸の三日月模様が特徴

＊クマに出会わないためには？

被害を防止するためには、まずクマに出会わないことが肝要だ。その地域における生息状況や、出没情報を把握しておくこと。また、山歩きするときは独りで入らず、おしゃべりしながら歩いたり、鈴をつけたりしながら歩き、こちらの存在をクマに知らせることが重要である。

クマがこちらの存在に気がついたら、ほとんどのクマは立ち去る。また、クマの糞や、クマ棚を見つけたら要注意。そこはクマの行動エリアであるので、深入りしないことだ。なお、子グマを見かけたら絶対に近づいたりせずに速やかに立ち去ること。近くに親グマがおり、母性本能を刺激された親グマは非常に危険だ。

▲ クマ棚

▲ツキノワグマの糞

▲ツキノワグマの爪痕

＊もしもツキノワグマに近くで出会ってしまったら？

ふつうの場合、クマに遭遇することはまずない。しかし、ドングリ類が凶作の年などには、人里に頻繁に出没するなど異常な行動をとることがあるため、クマと出くわすことも考えられる。

そのようなときのために、私たちがとるべき対処法を、状況別に紹介しておこう。

ケース　１：クマが逃げない、または近づいてくる場合（クマとの距離は数１０m以上離れている）

・クマと向き合った形のまま、目を見ないようにし、ゆっくり後ろに下がる。（走って逃げると、追いかける本能を刺激する。）
・大声を出したりして、クマを刺激しないこと。（あわてずにクマから視線をそらし、クマに脅威を感じさせないことが肝要。）
・自分を目立たせること。（クマが人間と認識していない可能性がある。腕をゆっくり振りながら自分を目立たせたり、穏やかに声をかけて人の存在を知らせる。）

ケース　２：近い位置で遭遇し、後ろ足で立ち上がった場合

・攻撃行動ではない、相手を確かめようとしている。冷静にケース１の行動をとる。

ケース　３：クマが突進行動を開始した場合

・まだ落ち着いて。多くの場合、威嚇突進行動だ。（突進して止まり、後退することが多い。）

ケース　４：ストレスを感じる行動が見られた場合

・クマが低くうなる、カプカプと顎を打ち鳴らす、口から泡を吹く、激しく地面を叩くなどのストレスを感じているときに行う行動が見られた場合には、穏やかに話しかけながら、ゆっくりと後退する。（急な動きや大声を上げないこと。近くに子グマがいたり、シカの死体などがあればより危険だ。）

ケース　５：３～４mまで迫ってきた場合

・その場に倒れ込み、腹部や頭部を守るうつ伏せの防御姿勢をとる。
・この場合、ザックは背中を守るプロテクターとなる。
・攻撃がおさまるまで動かない。（攻撃のほとんどは、自分や子どもを守ろうとする防御的攻撃である。）

■その他参考事項

＊ザックを置いて逃げるべきか？

・クマが逃げていかないようなら、クマの目的は、ザックの中の食糧かもしれないので、荷物を置いて逃げるのがよい場合がある。
・しかし、ザックは前述したように貴重なプロテクターとなることも忘れずに。
・また、人を攻撃して食料を得ようとする危険なクマをつくり出すことにもなるので、状況に応じた判断が必要。

＊木に登ることの是非？

・木に登るのも逃げる手段の一つだ。周りに手ごろな木があるようなら、自分が５メートル以上の高さまで登れそうな木かどうかを確認して登る。
・ただし、ツキノワグマは木登りがとくいであることは常識として知っておいた上でのことだ。海外における実例では、興奮したクマは木に登って逃げても追いかけて登ってくるが、足で鼻先を蹴りつけたりして助かった事例がかなりある。

＊クマよけの道具について

・クマよけの道具としては、鈴がよく知られている。また、クマと出くわす可能性の高い場所に入っていく場合には、いざというときのために、クマ撃退スプレーなどを携帯しておくとよい。

【クマよけ機材に関する問い合わせ】

（有）アウトバック：岩手県盛岡市手代森16-27-1　TEL；019-696-4647　など

【補足】ヒグマの場合

ヒグマの場合の対処法は、基本的にはツキノワグマの場合の対処法と同じだ。ただし、食性は基本的にはアキタブキなどの植物性ではあるが、ツキノワグマに比べると肉食性がちょっと強いことや、体サイズがかなり大きいことなどに留意しておく必要がある。

ツキノワグマの対処法と若干異なるのは、特にケース３～５の場合だ。

・積極的に近づいてきたり、曲がり角でいきなり出会ってしまい、数mしか距離がない事態に陥った場合には、覚悟を決めて戦うことといわれている。一番生存率が高いのが、戦った場合だからだ。
・この状況から走って逃げるのは不可能（ヒグマは時速50ｋｍで走る）。また、死肉を食べるヒグマにとって、死んだふりをしても対策にならない。
・戦う場合のコツは、鼻先に強烈な一撃を浴びせること。相手の前足攻撃より先に攻撃する。
・突然攻撃を受けて、最悪の事態（覆い被られたり噛みつかれたり）になった時には、手や足をクマの目や鼻先があるであろう位置に全力で出し続け、とにかく抵抗をする。一発でも急所に入ればびっくりして逃げていく可能性がある。

この他、自分の獲物への執着心が異常に強いことから、道ばたにシカなどの動物の食べ残し等があったら、絶対近づかないことが肝要だ。

北海道では、牛などを襲った場合、食べきれない肉を泥団子状にして残しておくことが知られている。

林内で、オジロワシが飛び出した場合なども、エゾジカの死体がある可能性が高いので、安易に近づくことは危険だ。

（理事長/佐藤仁志）

◆探鳥会訪問記（二子山定例探鳥会）

二子山定例探鳥会（神奈川支部）

参加日時：2013 年８月 18 日（日）
８時 00 分～14 時 20 分
天候：晴れ
参加者：12 名（男性４名、女性６名、財団事務局から堀本含む新人２名）
リーダー：男性３名

＜探鳥会概要＞

二子山は湘南・三浦半島地域で最大（約 200 万坪）の自然環境を誇る二子山山系の１つで、首都圏近郊に残された数少ない自然として、貴重な動植物の宝庫となっています。神奈川県逗子市と葉山町にまたがり、標高は約 200 m、その名の通り上ノ山と下ノ山の 2 つからなります。

集合場所は葉山町の長柄交差点バス停で、そこから集落を通り、二子山に入りました。今回のような夏の時期は山頂には登らず、二子山の南側山麓を流れる清流「森戸川」沿いを走る「大山林道」を往復しました。林道はアップダウンのない平坦な木陰の道で、この季節はハイキングをする人たちもほとんどおらず、周りを気にせずに済む歩きやすいコースでした。

＜探鳥会の様子と観察した鳥＞

８月の探鳥会。鳥が観察しにくいと言われるこの季節、鳥だけではなくて昆虫や植物も観察するという探鳥会は経験がありましたが、ここ二子山探鳥会ではそれだけに留まりませんでした。

林道に入る前、集落を流れる河川をじっと見下ろす参加者の皆さん。何を見ていたかというと魚でした。アユやボラが石に付いた藻類を食べる様子を観察し、
「アユが動物性の餌で釣れない理由が分かるなぁ。」
と、声が聞こえます。

林道の途中途中では、鳥の古巣も観察しました。ウグイスにメジロ、そして、サンコウチョウ。
「ウグイスは林道のすぐそばに作り、放棄してしまいました。」
「サンコウチョウは折れた枝がぶら下がっているような不安定な場所に巣を作ります。そういう場所の方が、ヘビなどが近寄りづらいのでしょう。」
と、リーダーが教えてくれます。サンコウチョウの古巣は比較的目立つ所にありましたが、ウグイスとメジロの古巣は茂みの中にありました。葉が生い茂っているこの時期にどうやって見つけたのでしょう。

林道の終点での昼食後、冬虫夏草が生える場所にも案内していただき、カメムシタケという菌類も観察することが出来ました。

▲河川の魚を観察する様子

そして、二子山での探鳥会は見るだけではありません。匂いを嗅いだり、味見をしたりもしました。
「クサギはピーナッツバターの香りがしますよ。」
「カリガネソウはレバーの香りだと思います。」
「鳥も好きなエノキの実は焼き芋の味です。」
リーダーの魅力的な言葉に参加者も手を伸ばし、頷いたり首を傾げたりしながら、味わいました。

▲エノキの実を味見

観察した鳥は、カルガモ、キジバト、アオサギ、ツツドリ（未確定）、トビ、カワセミ、コゲラ、アオゲラ、サンコウチョウ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ヤマガラ、シジュウカラ、ツバメ、コシアカツバメ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、センダイムシクイ、メジロ、オオルリ、スズメ、ハクセキレイ、外来種のガビチョウ、ドバトの 24 種（＋１）でした。

＜参加者の声＞

以下は探鳥会に参加しながら雑談の中でお聞きした参加者のお話です。

40 歳くらいの男性：長年山登りを趣味にしており、植物には興味を持っていました。普段は公園で開催されている自然観察会で勉強しています。鳥は今年の３月からで、多摩川河口探鳥会、鎌倉・源氏山探鳥会に続き３回目の参加です。

50 歳くらいの女性:鳥を見るようになって 10 年くらいです。家が近所で、二子山探鳥会には出来るだけ毎月通っています。気分転換をするために個人的に訪れることもあります。

60 歳くらいの女性：5 年くらい前にバードウォッチングを始め、ほとんど毎月参加しています。二子山探鳥会は雨でも開催されており、担当の方から「雨の方が人の影響を受けない自然な鳥の姿を観察できる」ということを教わってからは雨の日も行くようにしています。毎回新しい発見がありますよ。

＜まとめ＞

リーダーの１人は 20 年近く二子山の担当をされており、探鳥会以外でも月に数回センサスのため二子山を訪れているそうです。古巣はその際に見つけられたとのことですが、基本的には探鳥会の中で参加者と一緒に探すようにしているそうです。カメムシタケは７月の探鳥会で見つけたそうです。「毎年ほぼ同じ場所に発生する」とのことでしたから、ご自分の担当している場所を長年に渡りよく観察されていることの賜物なのだろうと思います。

時間をかけて観察が出来る時間配分にしているのでしょうか、上記では取り上げませんでしたが、例えばサンコウチョウが現れたときは声が聞こえなくなるまでじっくり観察する、ノブドウの実は割って中の昆虫も探してみる、ハンミョウが林道に現れたときには行動を想像しながら観察するなど、まるでその生き物の立場になったかのように時間を掛けて自然を観察する様子が印象的でした。今回は暑さが厳しかったこともあり、参加者は常連の会員の方が中心でしたが、別の季節には千葉県や東京都、埼玉県からも非会員の方を含む参加があるそうです。リーダーが心がけておられるという「鳥の生活を支えている生態系を広く観察する」という姿勢にファンが多いのだろうなと思いました。

（普及室/堀本理華）

◆探鳥会保険集計結果（2013 年７月分）

７月は６４支部からご報告をいただき、計１８８回の探鳥会が開催され、のべ3,４５０人が参加されました。

表１．７月の探鳥会保険集計結果（2013 年8月１５日現在）

支部	開催回数（回）	参加者数		スタッフ数（人）	合計人数（人）
		会員(人)	非会員(人)		
小清水	−	−	−	−	−
オホーツク支部	1	33	3	1	37
根室支部	−	−	−	−	−
釧路支部	−	−	−	−	−
NPO法人日本野鳥の会十勝支部	−	−	−	−	−
旭川支部	0	0	0	0	0
滝川支部	1	9	1	1	11
道北支部	−	−	−	−	−
江別支部	−	−	−	−	−
札幌支部	4	79	20	7	106
小樽支部	2	7	8	2	17
苫小牧支部	−	−	−	−	−
室蘭支部	1	11	0	2	13
函館支部	−	−	−	−	−
道南桧山	1	10	1	4	15
あおもり	−	−	−	−	−
弘前支部	2	12	2	2	16
秋田県支部	4	34	7	4	45
山形県支部	−	−	−	−	−
宮古支部	−	−	−	−	−
もりおか	2	16	6	6	28
北上支部	1	10	0	0	10
宮城県支部	2	25	7	4	36
ふくしま	2	36	0	6	42
郡山支部	2	17	0	4	21
二本松	1	2	0	1	3
白河	2	9	1	2	12
会津支部	−	−	−	−	−
奥会津連合	−	−	−	−	−
いわき支部	1	17	3	1	21
福島県相双支部	−	−	−	−	−
南相馬	1	12	8	0	20
茨城県	8	61	61	13	135
栃木	−	−	−	−	−
群馬	7	75	32	18	125
吾妻	2	19	1	3	23
埼玉	5	134	18	41	193
千葉県	6	114	21	25	160
東京	11	266	14	54	334
奥多摩支部	8	87	8	27	122
神奈川支部	9	126	34	29	189
新潟県	−	−	−	−	−
佐渡支部	−	−	−	−	−

富山	2	23	2	2	27
石川	1	18	0	3	21
福井県	0	0	0	0	0
長野支部	2	27	4	4	35
軽井沢支部	1	12	3	1	16
諏訪	1	7	13	2	22
木曽支部	1	13	5	2	20
伊那谷支部	2	10	6	4	20
甲府支部	2	33	8	4	45
富士山麓支部	1	13	7	2	22
東富士	−	−	−	−	−
沼津支部	1	15	0	2	17
南富士支部	2	27	2	3	32
南伊豆	1	1	0	2	3
静岡支部	−	−	−	−	−
遠江	2	31	5	6	42
愛知県支部	7	57	41	16	114
岐阜	−	−	−	−	−
三重	−	−	−	−	−
奈良支部	3	75	0	6	81
和歌山県支部	1	3	5	2	10
滋賀	3	12	16	6	34
京都支部	3	15	13	2	30
大阪支部	23	182	43	103	328
ひょうご	−	−	−	−	−
NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部	2	13	8	2	23
島根県支部	1	2	0	1	3
岡山県支部	5	97	74	20	191
広島県支部	1	8	9	1	18
山口県支部	2	19	12	2	33
香川県支部	2	53	9	3	65
徳島県支部	−	−	−	−	−
高知支部	1	16	8	1	25
愛媛	4	43	23	7	73
北九州	2	26	4	3	33
福岡支部	7	86	9	11	106
筑豊	4	18	0	4	22
筑後支部	0	0	0	0	0
佐賀県支部	3	43	2	3	48
長崎県支部	−	−	−	−	−
熊本県支部	3	69	8	4	81
大分県支部	2	16	1	2	19
宮崎県支部	2	15	10	2	27
鹿児島	2	26	0	4	30
やんばる支部	−	−	−	−	−
石垣島支部	−	−	−	−	−
西表支部	−	−	−	−	−
全国	188	2,345	606	499	3,450

備考：-は保険の申請がなかったことを示しています。

（普及室）

◆「初心者の対応、どうしてますか？」

８月号に引き続き、探鳥会における初心者対応について、東京の石亀明さん（ご担当：新浜探鳥会、Young 探鳥会（※））、落合はるなさん（ご担当：葛西臨海公園探鳥会、Young 探鳥会）からお聞きしたご意見をご紹介いたします。

（※）およそ 40 代くらいまでの方を対象とした探鳥会で、毎回多くの初参加者、初心者が参加している。

▶大磯の海でアオバトに出会う探鳥会と同時に開催されたＹｏｕｎｇ探鳥会の様子

●東京　石亀明さん、落合はるなさんからのご意見（後編）

■初参加者と常連参加者の交流を促す：次回の参加へ繋げる

途中から初参加の方とベテランの方を徐々に混ぜるということを出来るだけ試みています。というのは、初参加者だけが固まっていると知識が深まりにくく、やはり初参加者とベテランの方々が上手く混ざることで『あ、こういう雰囲気なんだな』『こういう会なんだな』ということがよく分かってもらえると思うからです。例えば、初参加の方の近くに住んでいる常連の方をご紹介すると、そこで盛り上がりだすということもよくあります。参加者の方同士で盛り上がっていただければ、徐々に私は引いてまた全体の進行に戻ります。女性だったら同じくらいの年齢層の方を紹介してあげるなど、参加者同士を繋げていくことを心がけています。要は探鳥会で担当と仲良くなるだけでなく、参加者同士で仲良くなっていただくことがポイントだと思います。

探鳥会の中で知り合いが出来ると、続けて参加していこうという気持ちが出てきたり、『私はいつも〇〇探鳥会に行っているんですよ』『じゃあ、私もそこに行きます』というような感じで今度は別の探鳥会に参加しようという気持ちになったりします。

一回だけ来て終わるのではなくて、同じ場所にまた来る、もしくは次に別の場所に来る、という循環を考えたいと思っています。言うのは易しいのですが、行うのはなかなか難しいです。

■常連参加者と初参加者のバランスの難しさ

常連の参加者に『リーダーになって下さい』とお願いしても『私リーダーになるのは嫌です』という方が多いのですが、『リーダーにならなくてもいいので、参加者のお世話をちょっとお手伝いして下さい』という形でお願いしておくと協力してくれる方が多いです。

そういうベテラン参加者に何人かいてもらいつつ、初参加者の居心地の良さをつくれないかとやってはいるのですが、なかなかそれが上手くいっているとはいえません。どうしても、ベテラン同士で固まってしまって、閉じたコミュニティになりやすいのです。それを上手く砕いて柔らかくしたいのですが、やはりベテランの方はマニアックで本当に先鋭的な話も聞きたい人もいるので、ベテランと初心者両方を上手く混在させるのが正直すごく難しいです。

■探鳥会の特徴を色分けして示したい

初心者がベテランになるためのコツとしては、毎月同じ場所に通っていただくことが有効だと思います。『ぜひ毎月来てください』とまではなかなか言えないので、『同じ場所に年４回、四季ごとに行くととても上達しますよ。見られる鳥も環境も変わっていていいですよ』という話はよく初心者の方にはしています。

そこで私は、探鳥会ごとに特徴を分かりやすく参加者に示して色分けができるとよいと思っています。例えば新浜探鳥会は探鳥地としてはマニアックで、鳥もシギ・チドリが多いので、正直言って初心者の方が多くは参加されない場所です。

一方で明治神宮などは都心で便利な場所で初心者の方がとても多い場所です。そのため、

明治神宮探鳥会では初心者の方が来ても迷わないように地図を配ったり、目的・目標が分かるように『今月の観察ポイント』を解説した小冊子を配ったりしています。

明治神宮探鳥会は多いときには参加者が100 名を超えることもありますが、担当は 6 名くらいしかいません。それでも初参加の方を上手に引き込みながらご案内していると思います。ただ、明治神宮の悩みは、鳥のいない夏場、昆虫や植物も手厚く説明するので、そうすると『野鳥の会なのに何で昆虫も見るんだ』というような反応もあることです。そのようなときには『ただ鳥だけ見ていても仕方がない、自然の一部として鳥。鳥がいろいろ関わっている植物や昆虫の中でトータルとして見ないといけないんですよ』ということを伝えながらやっています。鳥に走っている人の間で『明治神宮はつまらない』というような話が出てしまうと、とても残念なのですが。

■全国の探鳥会リーダーのノウハウを集める

日本野鳥の会東京のリーダーにはリーダーの心得が渡されますが、作ったのが 20 年くらい前の小冊子ですので、少し古くなってしまいブラッシュアップが出来ていません。基本はそこに書いてあることなのですが、より進化したノウハウが本当はあるはずで、それは全国の探鳥会リーダーがいろいろなアイディアをお持ちだと思います。それを探鳥会スタッフ通信で集めて、共通知に出来るといいなと思います。

（普及室/堀本理華）

◆協働探鳥会：仲間を増やすための探鳥会における東京の取り組み

全国的に会員数が減少しているなか、毎年 11 月に東京、神奈川、奥多摩の 3 団体と財団普及室が協働で探鳥会を実施しています。この探鳥会は会員数を増やすことを目的とした探鳥会です。今回、東京の川端一彦さんから協働探鳥会での取り組みについてお聞きしました。今月号と来月号でご紹介いたします。

■会員数の減少

- 会員数が減少していることが前提としてあると思いますが、東京の会員はどれくらい減っていますか？

川端　ピーク時は約6000名いましたが、10年程減少傾向が続いています。現在は半数の約3000名、毎年約100名ずつ減少しています。

- そのような状況の中で、会員を増やすことを目的とした探鳥会を企画して、実験的に実施されています。本格的な取り組みをされたのは2011年からでしたね。

川端　2011 年は東日本大震災があり、支部が活動紹介の場として利用していた「東京バードフェスティバル」や「巣箱コンクール」といった他団体のイベントが自粛され、支部として一般にアピールする場が無くなりました。そこでこれはまずいということになり、会員を増やすことにつながるイベントを沢山やろうということになりました。

▲事務局での聞き取りの様子。左が川端さん。

■「お試し入会」制度

- 2011年、2012年における東京での取り組みについて教えてください。

川端　ベースになっているのはお試し入会制度です。これは大阪支部が実施されている「むくどり会員」の制度からヒントを得て作りました。

会費 1000 円で半年間の会員になれる制度で、イベントなどで直接勧誘し、

その場で入会手続きを行い、その月の会誌を手渡します。次に、本会員への移行促進のため、会費切れの月になったら、レターを送付し本会員への移行を促します。収入は入会金の 1000 円、支出は 2011 年が会誌発行費 840 円（140 円×6 ヵ月）と正式入会勧誘レター郵送料 80 円の 920 円、2012 年はさらに絵葉書も送付したため郵送料 80 円がプラスされた 1000 円で、赤字にはなりません。1000 円札一枚で済むというところも押さえておきたかったですね。

- この制度は恒常的に実施しているものですか。

川端　いいえ、試しにやっているという位置付けです。まだ見直すところもあるだろうということで、毎年役員会の承認を得て、11月に2回ある協働探鳥会のイベントだけで実施しています。

■協働探鳥会における工夫点

- 協働探鳥会ではどのようなことを試していますか？

川端　リーダーからは「何か特別な配布物を用意して欲しい」「何か特別なことをやらなければいけないのではないか」との声も聞かれましたが、そうではなくて、「今の実力でやる、やらせて欲しい」ということで特別なものは用意しませんでした。

ただ、リーダーの数を普段の探鳥会より多くし、参加者7人程度に対してリーダーが1人となるようにしました。勧誘するためにはリーダーと参加者が仲良くなってもらわないといけないと考えたからです。リーダーを多くすることで、話題が豊富な特定の人に頼ってしまうことなく、自分たちの実力の平均値が分かります。

- 特別なツールを作らず、とにかくリーダーの数で初参加者を取り囲むように手厚くし、それから俗人化を防ごうということですね。

川端　リーダーには「参加者の人と仲良くなってください」とお願いしています。「この探鳥会の目的は勧誘なのだ」と初めに言ってあります。参加者に野鳥の会のことを知っていただくのは次のステップで良いと思っています。まずそのとっかかりのためにとにかく仲良くなってくださいということです。

- 参加者に野鳥の会のことを分かってもらい入会に誘うという考え方もありますが、人と人で距離を縮めるということを第一歩にしているところが大きな特徴ですね。

川端　また、鳥をたくさん見せたいからといって、鳥はいるけれど人はいない所に連れて行くのは駄目だろうという話もありました。勧誘目的であれば、バードウォッチングをしている姿を世間の人に見てもらい、自分たちが看板にならないと宣伝にならないだろうということです。だから、街の中の公園で開催する、人の多い所で探鳥会をやるということは大前提でした。

- 場所も重要ということですね。

川端　探鳥会をやっているところを周りの人が見て「何をしているのだろう」と思うことで、野鳥の会の存在感は生まれるはずなので、知らないところで活動している人たちではなくて、身近な普段の生活空間の中で「こういうことをしている人たちもいるね」というスタイルにしたいと思いました。

- 「今やっている探鳥会をどう勧誘に向けて改良していこうか」という話もありますが、そうではなくて、勧誘のための探鳥会と割り切って、そのための場所選択や対応の仕方などを徹底して考えていくという姿勢がやはり必要ですね。

川端　協働探鳥会は試験的にそのようにやってみているイベントですよね。普通の探鳥会も初めての人はウェルカムですし、皆それはずっとやってきています。それでにっちもさっちもいかなくなっていますから、普通の探鳥会と別な手段も用意しておいたら良いかなということで、共存出来るのでやっている感じですね。

- リーダーを増やし、フレンドリーになって居心地を良くしてもらうなどは、すごく難しい真似できないノウハウではなく、どの支部

でも真似していただけますよね。

川端　　そうですね。また、今までは『会員ではないけれども鳥に興味がある人』いう人たちを取り込みたいと思っていました。しかし、興味を持ってしまった人は、既に野鳥の会とは別にグループを作るなどして、スタイルが出来上がっていることが多いので、なかなか引き込むことが出来ません。そのため、まだ何もやっていない人や少し興味をひいたぐらいの人をターゲットにすると良いのではないかな、と思います。

－　まだ鳥好きとまではいっていないけれども、一度経験してみたいという方を広報で上手くつかまえてということですね。
　他に工夫点はありますか。

川端　　このイベントに関しては支部報、支部のブログにも一切載せず、会員を寄せ付けないつもりでやっています。勧誘のための探鳥会では、リーダーのサービスを非会員に集中させたいからです。それもあって広報は財団にお願いしています。
　また、リーダーにはミニミニ野鳥図鑑（※）を使って観察会をやるようにお願いしています。それともう一つ大事なのは、「参加者の目や耳に入ってくる鳥を説明する」ということで、「遠くで珍しい鳥が鳴いたなどは無視してください」と徹底しています。そのため、例えばこの季節だとジョウビタキが渡ってきたりしたら注目したくなるのですが、遠くでヒッヒッという声が聞こえていても、近くにいなかったら見えませんから、そんなのは話をしない。それよりも頭の上でシジュウカラが動いていたらそれを見せてください、ということは毎年お願いしています。そういう意味では普通の探鳥会とは違うやり方ですね。また、近くで動いているのは分かるけれども、声だけしか聞こえない場合は、図鑑を出して、絵を指して「これが鳴いているんですよ」という風に説明してくださいとも言っていますね。「あれが鳴いています」「これが鳴いています」と詳しい人が集まるとそれで済んでしまうこと多いですが、そうではなくて絵を出して、「これが今鳴いていますよ」とやってくださいとお願いしています。

（※）バードウォッチングをはじめていただくためのツールとして財団普及室が制作している小冊子

（次号へ続く）

（普及室/箱田敦只 ・堀本理華）

◆普及室からのお知らせ

■夏休みに親子向け「バードカービング体験講座」を実施！■

野鳥や自然に興味を持つきっかけは、実際にバードウォッチングを体験するだけでなく、俳句、絵画、写真などいろいろです。普及室では、バードウォッチングのきっかけとなるいろいろな講座を試してみようと考えています。今回は、「バードカービング体験講座」を実施しました。

□講座の広報について

普及室では、「ミニミニ野鳥図鑑」（バードウォッチングをはじめていただくためのツールとしての小冊子）や「ヒナとの関わり方がわかるハンドブック」（春から初夏にかけて、野鳥のヒナを拾ってしまったときの対処方法をお知らせするための小冊子）を制作し、新聞や雑誌などで紹介していただいております。お申込みいただいた方に無料でお送りし、この時に、メールアドレスもいただけるようにお願いしております。

今回、上記の方法でメールアドレスをいただいた約 8,000 名の方に、メールでこの講座のお知らせをしました。メールでのご連絡は郵送とは違い、送料がかかりません。『メール送信』は、手軽に確実に情報を伝達できる有効な広報手段です。

その他、ブログ、ツィッター、フェイスブックで情報を発信しました。

その結果、募集開始から 10 日ほどで、定員の 10 組に達しました。

□体験講座の日程について

夏休みの自由研究としていただけるように、夏休み中の８月22日（木）としました。平日の開催としたのは「母と子」、「祖父あるいは祖母と孫」での参加が見込まれることや、バードプラザ（当会事務所に併設されているショップ）も見ていただけるようにと考えたためです。

□講座の内容（展開について）

<u>バードカービングとバードウォッチングの話など（15分）</u>

はじめに、カモが水辺に浮かぶ画像をお見せしました。そのカモがバードカービングの作品であると聞いて、参加者からは、「えっ、本物かと思った」と声が聞こえました。バードカービングは狩猟のおとりとしてはじめられたのです。

次に、シジュウカラの２枚の画像を順番にお見せし、「オスはどっちかな？」と、講師が問いかけました。参加者はもう一度見せられた２枚の写真をじっくりと観察していました。同じような手順で、数種の画像をお見せし、嘴の形や体の模様などの細かな特徴を参加者に観察していただきました。

この講義では、リアルなバードカービングを制作するためには、鳥の特徴をじっくりと観察することが重要であるということを実感していただきました。

<u>バードカービング制作（95分）</u>

題材は「ミニカワセミ」。実演を交えて、全体の手順を説明しました。

▲材料の写真

材料は、荒く削った本体と２枚の翼、台座、本体と台座をつなげる心棒です。

以下は、手順です。

１、 羽の角を丸くする
２、 サンドペーパー＃240で羽をつるつるにする
３、 丸くなった羽の裏に鉛筆で名前を大きく書く
４、 ３の羽と心棒にオイルステイン（塗料）を塗る（講師）
５、 嘴形を整える
６、 体、頭部を丸くし、サンドペーパー＃240でつるつるにする
７、 体に羽をボンドで接着して完成

教室内には、バードカービングの作品のほか、野鳥に関する図鑑や写真集なども設置し、手の空いた時間を利用して、野鳥や自然への興味関心を深めていただけるようにしました。

<u>まとめの話（10分）</u>

野外で実際に野鳥を観察することがバードカービング上達の近道であることを伝え、最後に連携団体が実施している探鳥会をご案内しました。

▲集合写真。手にはご自身の作品

□講座を終えて

参加者は、ほとんどバードウォッチング未経験者。終了後、当会の図鑑を購入された方もいました。「バードカービング始めます」、「『野鳥おもしろ図鑑』を買って楽しんでいます」、「近所の野鳥が気になるようになりました」「図鑑を見るだけで野鳥を楽しんでいましたが、実際に野外で観察してみました」などの感想が、後日、メールで届いています。

野鳥をはじめとする自然に興味を持つきっかけは様々であり、バードカービングもそのひとつであることを実感できました。普及室では、バードウォッチングの入口を広めるために、い

いろいろな講座を実施していきます。
　今回、講師は、当会の会員であり、日本バードカービング協会副会長の水上清一氏にお願いしました。普及室スタッフも講師補助として参加者に対応しました。連携団体の皆様の中にもいろいろな特技をお持ちの方がいて、バードカービングをされる方もいられるのではないでしょうか？
　バードウォッチングの入り口の「バードカービング体験講座」。イベントのひとつとして、試してみてはいかがでしょうか。
　バードウォッチングをはじめてくださる方が増える可能性があると感じております。

▲完成作品「ミニカワセミ」
（普及室／林山雅子）

■連携団体主催の探鳥会を広報しています■

　普及室では、連携団体主催の探鳥会情報をパンフレットにまとめ、非会員にお送りしています。このパンフレットは、非会員に向けて年４回お送りしている、通信販売用のバードショップカタログのダイレクトメールに同封しています。
　６月下旬に引き続き、９月下旬には「ミニミニ野鳥図鑑」と「ヒナとの関わり方がわかるハンドブック」に新聞広告などを通じてお申込いただいた全国約 8000 名の方に、22 団体の探鳥会情報（10 月～12 月開催予定分）をお送りいたしました。探鳥会の選定につきましては、財団ホームページの探鳥会情報に掲載されているものを優先し、掲載前には各連携団体に内容の確認をお願いしています。
　パンフレットをご覧になった非会員の方が、探鳥会を訪れてくれることを期待しています。なおこの取り組みは、実際に参加に結び付くかどうかの様子を見ている試行の段階です。効果がありそうでしたら今後掲載する連携団体を広げることも検討したいと思っております。
　情報が掲載されている探鳥会のリーダーの皆さまには、初心者の方が来ていないか気にかけていただけますと幸いです。

（普及室/堀本理華）

▶探鳥会情報を載せたパンフレットの表紙

◆記事への感想お待ちしています

　探鳥会スタッフ通信では記事へのご意見、ご感想をお待ちしています。支部名とお名前を明記の上、tancho-staff@wbsj.org までお送りください。
　また、引き続き「初心者対応」についてのご意見の他、「女性や子どもなどを対象にした対応」についてのご意見を募集します。ぜひ様々な取り組みをご紹介ください。

◆探鳥会スタッフ通信（電子メール版）の購読について

探鳥会スタッフ通信は、支部の探鳥会スタッフならどなたでも購読できます。（無料です）

ご希望の方は、「探鳥会スタッフ通信希望」と明記のうえ、①支部名 ②担当している探鳥会名 ③お名前 ④ご住所 ⑤電話番号 ⑥メールアドレス（パソコンやスマートフォンのアドレス）を記入し、tancho-staff@wbsj.org へお申し込みください。バックナンバーとともにメール版を送信いたします。

配信を希望されない、メールアドレスの変更などについても、tancho-staff@wbsj.org までお知らせください。

★編集後記

朝晩はだいぶ涼しく感じられ、日に日に秋が深まっていくようです。

今月の探鳥会スタッフ通信では、東京のリーダーの方々からお聞きした「初心者対応」へのご意見や「仲間を増やすための探鳥会」における工夫点を紹介しています。記事へのご感想や、皆さまが担当されている探鳥会での取り組みについて教えていただけますと幸いです。

（普及室/堀本理華）

日本野鳥の会
探鳥会スタッフ通信　第6号
◆発行
（公財）日本野鳥の会　2013年9月26日
◆担当
普及室　普及教育グループ
〒141-0031
東京都品川区西五反田3-9-23丸和ビル
TEL：03-5436-2622
FAX：03-5436-2635
E-mail：tancho-staff@wbsj.org